

平成22年 5月 18日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19720076
 研究課題名（和文）ビルマ歌謡におけるジャンル形成：18－19世紀の歌謡創作技法の分析を中心として
 研究課題名（英文）The Formation of Genre in Burmese Songs with Special Reference to Song Creating Techniques from Eighteenth to Nineteenth Centuries
 研究代表者
 井上 さゆり（INOUE SAYURI）
 大阪大学・世界言語研究センター・講師
 研究者番号：40447503

研究成果の概要（和文）：歌謡を掲載した写本の分析、現在のコンクールでのパフォーマンスと楽器（特に竪琴）を学ぶ生徒らの記録と観察、口頭伝承による実技の訓練を大きな柱として研究期間作業を進めた。この結果、口頭伝承において歌謡作品の旋律形が重要な役割を果たしていること、統一されつつある歌謡作品のヴァリエーションがコンクールでさえまだ見られる状況、古典歌謡のジャンル区分が為されてきた経緯及びジャンル区分が演奏に及ぼす影響などを明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：I analyzed song anthologies manuscripts, and observed the performance in the competition of performing arts which is held every year, and students who study instruments, especially Burmese harp. I also took lessons of Burmese harp by orally from my teacher. I demonstrated that, in oral tradition, the tune patterns have a important role. Further, the variant which is said to be unified because of recordings, educational system, still can be observed even in the competition of performing arts. Meanwhile, I illustrated how the genre divisions in classical songs had been formed, and I concluded these genre divisions have influence on performance.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	0	1,400,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	570,000	3,870,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：ビルマ、音楽、歌謡、文学、ジャンル、写本、貝葉、詩

1. 研究開始当初の背景

従来、ビルマ古典歌謡に関する研究は、国外の音楽学者による調律・音階の分析、もしくは現地学者による文学作品としての分析

に終始してきた。ビルマ及び東南アジアの文芸についての研究は、調査・記述及び近現代文学の歴史的・社会的脈絡での解釈にとどまっております、作品を歴史・社会背景へ還元する

ことが目的とされてきたと言える。しかし、こうした分析観点は、作品そのものの分析を行わない印象論に陥りがちである。特にビルマ文学・歌謡については、作品の列挙と解説に終始したウー・ペーマウンティンの『ミャンマー文学史』（1983年）に代表される文学史の描き方によって、ビルマ文学・歌謡についての枠組みが規定され、そこで提示される歌謡ジャンルが自明のものとして捉えられた。創作の営みについては言及されず、遺産として残された作品の目録・整理・解説に終始してきたとも言える。

一方、1960年代以降、国内外の音楽学者による音楽構造の分析が行われてきたが、確認できる演奏をもとにその構造を分析し示すに留まり、作品が作られた時代にさかのぼって検証した研究は為されていない。また、ビルマ音楽は歌謡であり、旋律と歌詞が中心となるにも関わらず、記述・分析されてきたのは楽器伴奏のみである。

近年では、文学や音楽の政治的観点からの分析を行った研究がいくつか為されているが（Allot 2000, Douglas 2001, 2005）、一次資料に基づかず、また韻文である歌詞を扱わずに、政府による保存等の取り組みにのみ注目した研究であり、創作の営みそのものが展開していく軸となる創作技法、創作概念が存在することは無視されている。政府が「伝統」としての歌謡保存を進めているという議論の中で、そもそも政府が何を「伝統」として捉えようとしているのか、その対象の実態については触れられない。

以上のいずれの研究にも共通していることは、現在「伝統歌謡」として捉えられている作品の総体について、その中身と枠組みを十分に検討することなしに、分析が試みられていることである。また、歌謡は豊富な文献資料を有するにも関わらず、そのアクセスと利用の困難さから、これまでどの学者によっても本格的に資料が利用されていない。

申請者は、一次資料である写本の分析を通して、現在言われているような歌謡ジャンル概念が成立したのは、古典歌謡のレパートリーが作曲されてだいぶ後の19世紀末頃ではないかという着想を得た。歌謡ジャンル名が現れてくるのは、19世紀末から20世紀初頭にかけて作られた写本においてである。また、1999年～2001年にミャンマー文化大学音楽学部留学して歌謡の歌唱法と堅琴演奏を学ぶことで、歌謡の分析には詩と旋律の両方の面を見ていくことが必要であるという確信を得た。歌詞内容については、従来、社会的背景の反映のみが指摘されてきたが、作品の構造を学ぶことで、作品創作には創作を可能としている創作概念とシステムがあり、この点について分析することが、創作という営みについて考察していく上で重要であると

考えるに至った。特に、創作の営みについて考察していくには、創作技法とジャンル形成過程を見ていくことが最も重要であると結論するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ビルマ国文学の核である「タチンジー」と総称される古典歌謡のジャンル形成過程を明らかにすることである。その手順として、(1) 貝葉や折り畳み写本等の一次資料の調査・分析を行い、(2) 口承で伝えられる歌謡の旋律及び伴奏となる楽器の演奏技法の分析から作品が作られた当時の音楽構造を再構成し、(3) 以上の歌詞と旋律の両方の面から創作技法を分析することによって、現在に伝えられる古典歌謡のジャンル及び枠組みが形成された過程を明らかにする。この作業によって、これまで自明のものとして扱われてきた古典歌謡ジャンル概念を捉えなおし、作品を列挙した形の従来の歌謡史像に対して、創作の営みとしての歴史のダイナミズムを描き出すことを目的とする。

本研究では、3年の研究期間内に、申請者がこれまで行ってきた歌謡の二大ジャンルである弦歌と鼓歌の分析に加え、その他の歌謡ジャンルを合わせて歌謡を包括的に分析し、古典歌謡全体の創作過程を明らかにする作業を進める。古典歌謡には弦歌、編み歌、受け歌、鼓歌、哀愁歌、アユタヤ歌他多数のジャンル分類が行われているが、このうち、古典歌謡のほぼ6割を占めている弦歌と鼓歌の分析をこれまで行ってきた。これまでの調査で、写本に大量の歌謡が記述され残されていることが分かっており、また弦歌と鼓歌については、19世紀末頃にジャンル分類が確立していたことを明らかにしてきたが、その他のジャンルについても同様のことが想定できる。また、特に重要な点として、弦歌と鼓歌の創作技法の分析において、個々の作品が個別に創作されているのではなく、既存の作品の部分（旋律、歌詞）を借用、引用しながら創作が行われていたことを明らかにしたことを挙げたい。替え歌が大量に見られるなど、歌謡の創作技法を分析することによって、作品相互の関係を明らかにしていくことができた。本研究では、この観点を軸に据え、作品を時代順に列挙して解説するという従来の文学史・歌謡史を塗り替えるべく、創作の営みのダイナミズムを描き出す作業を行う。創作技法を明らかにし、個々の作品の作られ方を丹念に見ていくことによって、詠み人知らずで作られた時代の分からない大量の作品についても歴史的に位置づけていくことができることを示し、その中で、従来、ジャンルごとに分けて捉えられてきた歌謡を包括的に捉えなおし、作品の生成とジャンル形成過程を明ら

かにする。

本研究の学術的な特色及び独創的な点は、第一に、従来ほとんど使用されていない一次資料である写本を用いて歌謡ジャンル形成過程を解明することである。歌謡関係の貝葉・折り畳み写本を包括的に扱った研究は皆無であり、著名な数点の貝葉を使用した研究が1点あるのみである (Myin Kyi 2001)。ほとんどの研究は編纂の加えられた刊本を利用したものである。

第二は、従来自明のものとして捉えられてきた歌謡の各ジャンルについて、ジャンル概念そのものを捉えなおすことである。その際、これも従来研究されていない創作技法の分析という手法を取る。申請者はミャンマー文化大学音楽学部で二年間歌謡の歌唱と演奏技術を学び、口承で伝えられる歌謡の構造を身につけた。その過程で、旋律と伴奏にいくつものパターンがあり、それらが複数の曲で共有されていることが分かった。また、外国人研究者のほとんどいない韻文を読む訓練を受けており、歌詞構造と音楽構造の両面から歌謡の創作技法を分析することを目指す。

3. 研究の方法

(1) これまで調査撮影してきた歌謡集の写本に加え、さらに資料を収集する。

(2) 楽譜を用いずに口承で伝えられる古典歌謡の歌唱・演奏技術について、現地に赴いて歌謡の技術 (歌唱と堅琴演奏) を習得する。研究期間内に、古典歌謡で最も難しいと言われる鼓歌のジャンルに属する作品を3曲、アユタヤ歌謡を1曲、編み歌2曲を、師匠からの口承での教授により習得した。

(3) 毎年芸能コンクールが行われる7-9月に現地に赴き、芸能コンクールにも赴いて現在の演奏形態を記録。特に、マンダレー管区予選の様態をビデオ、カメラで撮影。

具体的には各年度以下の方法で研究を進めた。

平成19年度：古典歌謡の歌唱・演奏技術について、1999～2001年の2年間の留学中に数十曲を学んだが、歌謡ジャンル形成について考察していくためには、さらに多くの作品の構造を知る必要がある。そのため、歌謡の技術 (歌唱と堅琴演奏) 習得のために現地に赴く。時期は例年政府主催の芸能コンクールが行われる8～10月に合わせる。その際、芸能コンクールにも赴いて現在の演奏形態を記録する。

この年の研究成果を東洋音楽学会大会にて口頭発表を行う。

平成20年度：前年度に引き続き、歌謡の技術 (歌唱と堅琴演奏) 習得及び、現在の演奏・教授の状況調査のために現地に赴く。時期は例年政府主催の芸能コンクールが行われる8～10月に合わせる。同時期に開催され

ている芸能コンクールのマンダレー管区予選にも赴いて現在の演奏形態を記録する。

10月には、International Burma Studies Conference (アメリカ、Northern Illinois University.) にて口頭発表する。

平成21年度：6月にこれまでの歌謡研究に加え、ビルマの歌謡と詩の比較研究を、日本口承文芸学会のシンポジウムで口頭発表する。

昨年度に引き続き、歌謡演奏の実技 (堅琴演奏) 習得及び、現在教授の状況調査のためにミャンマーに赴く。時期は例年同様、政府主催の芸能コンクールが行われる8～10月に合わせる。そして、マンダレー管区における芸能コンクール予選を中心に、現在の演奏形態を記録する。

また、19年度より取り組んできた、古典歌謡の録音資料のデータベースの整理を進める。申請者の所有する録音資料は、1960年代のラジオ放送など、録音資料として最も古い時代のものを含んでおり、現在では入手困難であるものも多い。

4. 研究成果

19年度の作業として実施したのは、第一に、現地における古典歌謡教授方法・芸能コンクールの調査である。時期は、8月22日から9月19日である。ヤンゴンでは現地音楽家や研究者へのインタビューの他、現代最も著名な古典歌謡歌手のドー・イーイータンのもとで堅琴奏法について実習を受けた。また、ヤンゴン文化大学音楽学部での調査を行い、特にサインワイン (環状太鼓楽団) や堅琴の伝承形態についての調査 (インタビュー、ビデオ・写真撮影等) を行った。パガンでは仏塔において楽器が描かれた壁画の調査を行った。2001年に亡くなった近年では最も著名な堅琴奏者のウー・ミインマウン宅 (マンダレー市) を訪れ、氏の手書きの楽譜等の調査を行い、また、氏の妻であるドー・キンメイより堅琴奏法の実習を受けた。その他、主にヤンゴンで資料収集 (音楽関係の最近の出版物を中心に) を行った。この調査において、代表的な楽器である堅琴・サインワイン (打楽器楽団) の教授方法と芸能コンクールの地方予選の様態をビデオで詳細に撮影記録した。コンクールの様態を撮影できたのは、芸能コンクールの堅琴部門の審査委員長でもあるドー・キンメイの協力による。

本調査の結果、近年、口頭伝承である堅琴演奏法の教授に楽譜が用いられる場合も出てきていること、芸能コンクール参加者の増加及び若年化等が明らかになった。これは、古典歌謡の主要なレパートリーや音階構造の変化を引き起こすことが考えられ、古典歌謡演奏の現在の様態を捉える上で重要な視点となる。また、教師の真似・暗記を繰り返させる教授法がやはり教授における中心的な方法であり、その方法は楽器の形態によって一部異なることも明らか

かになった。教授法の分析は創作方法の考察にも重要であり、本研究課題の目的であるジャンル形成過程を明らかにするために重要な視点である。

この調査の結果を踏まえ、単著『ビルマ古典歌謡の旋律を求めて：書承と口承から創作へ』（風響社）を出版した。さらに、ビルマ古典歌謡のジャンル形成過程について、(1)写本調査、(2)歌詞分析、(3)音楽理論分析の3点からの研究成果を、『アジア・アフリカ言語文化研究』及び東南アジア学会、東洋音楽学会の学会誌に投稿論文として投稿し、いずれも受理された。

20年度の作業として実施したのは、第一に、現地における古典歌謡教授方法・芸能コンクールの調査である。期間は8月17日から8月30日である。ヤンゴンでは、国立公文書館に所蔵されている貝葉文書の調査を、元国立図書館長であり、報告者と同じ音楽を専門とするウー・キンマウンティン氏と共に行った。結果、国立公文書館には薬学関係以外の貝葉文書がないことが判明し、これまで行ってきた国立図書館、大学中央図書館、大学歴史センターとあわせて、ヤンゴンの公的機関に所蔵された貝葉文書・折畳写本写本の調査は終了した。ウー・キンマウンティン氏と次回調査をマンダレー大学図書館で行う計画を立てた。また、今回の調査地の中心であるマンダレーでは、2001年に亡くなった近年では最も著名な堅琴奏者のウー・ミンマウン宅を訪れ、氏の妻であり、自身も優れた堅琴奏者であるドー・キンメイより堅琴奏法の実習を受けた。さらに、ウー・ミンマウンが残した手書き楽譜のうちの一部のコピーを入手した。加えて芸能コンクールの堅琴部門の審査委員長でもあるドー・キンメイの協力により、芸能コンクール地方予選の様様をビデオで撮影記録することができた。その他、主にヤンゴンで資料収集（音楽関係の最近の出版物及び、2008年中に発売されたCD・DVDの購入）を行った。

20年度はこれまでの調査の結果を踏まえ、10月3日にアメリカ・イリノイ州 Northern Illinois University で開催された Burma Studies Conference において口頭発表を行った。また、10月には Society for Ethnomusicology 学会 (Wesleyan University, アメリカ) に参加し、ビルマ古典音楽並びに民族音楽研究の大家である Robert Garfias 教授、Judith Becker 教授と議論を行った。この時に Judith Becker 教授と話をしたことからその後、報告者も初めて目にした貴重なビルマのレコードを譲り受けることとなった(2010年5月)。Judith Becker 教授は60年代にビルマ音楽研究を行った先駆的研究者であり、その後は同国への入国制限のため、現在ではフィールドをビルマ以外に変えている。報告者が譲り受けたレコードは現在ではほとんど所在の確認できない、貴重なものである。古典歌謡を録音したもので、

このデジタル化と解説の執筆を行い出版することが今後の研究課題として設定することができる。

さらに、前年度投稿・受理された論文の校正を行い、「ビルマ古典歌謡における創作技法とジャンルの分化—チョー（弦歌）からパッピョー（鼓歌）へ—」（『東南アジア歴史と文化』）「ビルマ古典歌謡における作品とジャンルの関係—演奏様式の解釈としてのジャンル—」（『東洋音楽研究』）が発行された。

21年度の作業として実施したのは、第一に、現地における古典歌謡教授方法・芸能コンクールの調査である。期間は8月22日から9月24日である。報告者はビルマ古典歌謡の楽器である堅琴の曲の中でも、最も難易度の高いジャンルであるパッピョー（鼓歌）の作品を、マンダレーにおける代表的な堅琴教師のドー・キンメイから受け、さらに、毎年記録を続けている芸能コンクールのマンダレー管区予選の様様をビデオで撮影記録した。ビルマ古典歌謡の教授は現在でも口頭による伝承が主であり、定期的に現地で演奏技法の教授を受けることは、口頭伝承のあり方を体験するために重要であり、本研究課題の目的であるジャンル形成過程を明らかにするために欠かせない。

21年度はこれまでの調査の結果を踏まえた上で、歌謡と詩の比較研究を加えた研究成果の口頭発表を6月7日に第33回日本口承文芸学会大会（於、奈良教育大学）のシンポジウムにおいてパネリストとして行った。さらに、今年度の研究成果を論文「ビルマ古典歌謡におけるジャンル概念—ウー・サ歌謡集の19-20世紀における貝葉写本の分析を通して—」にまとめて発表した（大阪大学世界言語研究センター論集3号）。さらに、本研究の主な目的の一つである、ビルマ古典音楽のアナログ音源のデジタル化、作品の特定と整理の作業を進めた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 井上さゆり、歌われる詩と歌謡—十九世紀のビルマの鼓歌の詩形式を例に一、査読無（学会シンポジウム原稿）、33号、2010、146-151
- ② 井上さゆり、ビルマ古典歌謡におけるジャンル概念—ウー・サ歌謡集の19-20世紀における貝葉写本の分析を通して—、大阪大学世界言語研究センター論集、査読有、3号、2010、73-107
- ③ 井上さゆり、ビルマ古典歌謡における作品とジャンルの関係—演奏様式の解釈としてのジャンル—、東洋音楽研究、査読有、73号、2008、1-20
- ④ 井上さゆり、ビルマ古典歌謡における創

作技法とジャンルの分化—チョー（弦歌）からパッピョー（鼓歌）へ—、東南アジア歴史と文化、査読有、37号、2008、28—59

⑤ 井上さゆり、ビルマ古典歌謡におけるジャンル区分の形成—貝葉写本における歌謡集の分析を中心として—、アジア・アフリカ言語文化研究、査読有、74号、2007、121—163

〔学会発表〕（計3件）

① 井上さゆり 歌われる詩と歌謡—19世紀のビルマの鼓歌の詩形式を例に—、第33回日本口承文芸学会大会、奈良教育大学（奈良市）、2009年6月7日

② 井上さゆり、The Formation of Genre Division in Burmese Classical Songs: with Special Reference to Song Anthologies in Palm Leaf Manuscripts, Burma Studies Conference, Northern Illinois University, Dekalb, Illinois, U.S.A., 2008年10月3日

③ 井上さゆり、ビルマ古典歌謡におけるジャンル区分の形成—歌謡集の分析を通して—、東洋音楽学会、上越教育大学（上越市）、2007年11月18日

〔図書〕（計2件）

① （共著）井上さゆり、河出書房新社、町田和彦編『世界の文字とことば』「ビルマ語」、2009、102-103

② 井上さゆり、風響社、ビルマ古典歌謡の旋律を求めて—書承と口承化ら創作へ、2007、57

6. 研究組織

(1)研究代表者

井上 さゆり (INOUE SAYURI)

大阪大学・世界言語研究センター・講師

研究者番号：40447503

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし